

# 「造形表現」の授業展開についての一考察 —小学校図画工作との比較をもとに—

## A Study on the teaching Methods of “Arts and Crafts in Preschool” : Based on the Comparison with Primary School

笥 有子

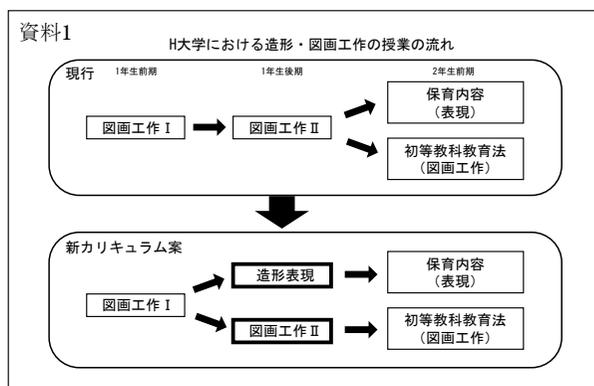
### I 本研究の経緯

筆者の勤務する大学では、幼稚園教諭と小学校教諭を同一学科内で養成していることから、これまで文科省の特例事項に則り、幼稚園教諭免許の教育課程において「領域に関する専門的事項」を小学校の教職課程「教科に関する専門的事項」によって充てていた。つまり、国語、算数、生活、音楽、図画工作の授業を受けることによって、幼稚園教諭免許を取得する学生の「健康、人間関係、環境、言葉、表現」の5領域の授業に替えていた。しかし、幼稚園教職課程においても校種に合った専門領域に対応する授業を令和3年度までに開講する必要が生じている<sup>1</sup>。

現状では、造形・図画工作分野でも、幼稚園教諭と小学校教諭のどちらかまたは両方の免許を取得希望している1年生の学生全員がABクラスに分かれ前期に「図画工作Ⅰ」、後期に「図画工作Ⅱ」を共に受講し

ていた。しかし今後は資料1の「新カリキュラム案」のように「図画工作Ⅰ」によって全学生が基本的な造形活動を習得したのち、これまでの後期の「図画工作Ⅱ」を変更し、幼稚園教諭免許取得を目指す学生の受講する「造形表現」と、小学校免許取得を目指す学生の受講する新しい「図画工作Ⅱ」に分け、1年生後期の段階から専門性に特化しながら学ぶ必要がある。

造形・図工・美術教育では、絵具や粘土など、幼児から高校生までのどの学習段階でも使用される幅広い発達段階に共通の材料・用具が存在するという特徴がある。また幼稚園造形表現はもちろん、小学校図画工作においても、教育目標に対応していれば取り扱う題材は原則として教員の裁量に任されており、題材や授業構成においては自由度の高い教科であるという特徴がある。小学校図画工作の場合には、実際には材



料などの都合上教科書の内容に沿う場合も多いが、やはり次世代を担う教育現場で活躍する人材を養成するという意味では、この教科本来の特性や価値観を知り、教員となった場合の授業の題材に対する独自の発想力や創造力を養う必要がある。これまでの図画工作Ⅰ・Ⅱの授業ではこのような領域・教科の特徴を利点として活かし、(1)子供たちの豊かな創造性を育む教員として自己の創造的な技能や発想を豊かにし、活動内容や授業構成の自由な発想力を養う(2)保育園、幼稚園、小学校、特別支援学校の、全ての学生の目指す現場に共通する材料や用具に触れる(3)自らの将来目指す現場だけでなく周辺の関係する校種で使用されている材料用具を知り、将来の現場での応用に生かす、の3点を念頭に置くことで幼稚園教諭と小学校教諭の免許取得を目指す学生の共通授業として成立するように構成していた。

しかしながら、特に材料用具の使用法についての発達段階の詳細について検討することや、各校種における教育要領・指導要領に対応した具体的で実践的な活動・授業の課題を構成する事が難しいという課題があった。例えば小学校の免許を取得する学生は、1年次に受講する「図画工作Ⅰ」「図画工作Ⅱ」の後、2年次以降に小学校課程の各教科の指導法に関する授業の1つとして「初等教科教育法（図画工作）」を受講することから、これまでは2年次に受講する初等教科教育法の最初の5回程度において小学校のみで多く取り扱われる題材や材料を取り扱うことで上記の課題を補完していた。しかし、小学校課程の指導法に関する学習内容が後回しになり、子供達が楽しめる題材として典型的な工作や立体活動をすれば良いという安易な実践が見られがちで、授業目標や題材設定に関する深い学びがあまりみられず、最終的な模擬授業の実践段階で指導法に関する必要な学習が進んでいないという課題も起こっていた。このことから、材料や題材に触れる段階を前倒しし、初等教科教育法においては指導法に関する授業内容に集中する必要がある。また、保育士・幼稚園教諭志望の学生においては、例えば墨で遊ぼう、という課題を授業で行った時に「この課題は幼稚園や保育園ではできないと思う」という意見が多かった。実際には墨を使用した未就学児での実践の事例は数多く報告されているが、学生にとっては具体的に対象年齢を想定した用具や材料の配置などがされていないと応用のイメージがつかみにくいこともわかった。

上記のような課題に対応し、現状の「図画工作Ⅱ」の授業を「造形表現」と小学校課程取得者の新「図画工作Ⅱ」に分けるにあたっては、現状を整理し、それぞれの活動・教科の違いを明確に認識し、授業内容はどうかを検討する必要がある。そこで本研究では、この課題に対する先行研究を整理した上で現状の授業内容を精査し、前期に行われる共通授業である「図画工作Ⅰ」ではどのような題材を学び、その後選択となる「造形表現」と「図画工作Ⅱ」ではそれぞれどのような題材に取り組むのがふさわしいかを検討し、新カリキュラムに向けた授業改善に生かしたいと考えた。

## II 研究の視点

### 1. 教育要領と指導要領の比較

幼稚園と小学校での造形教育、つまり造形表現と図画工作の違いはどこにあるのか。この点について、まず幼稚園教育要領と小学校学習指導要領第1学年及び第2学年（資料2）を比較することで探る。ここでは、幼稚園の表現領域の目標とねらい、小学校の図画工作の目標とねらいを、その文章の違いに注目し、文節ごとに比較できる部分を取り上げてみたい。以下、幼稚園教育要領を（幼）小学校学習指導要領図画工作科を（小）と表記し、まず2つの目標を文節ごとに比較する。

「自分なりに表現することを通して（幼）」＝「表現及び鑑賞の活動を通して（小）」

「感じたことや考えたことを（幼）」＝「造形的な見方、考え方を働かせ（小）」

「豊かな感性や表現する力を（幼）」＝「形や色などと豊かに関わる資質、能力を（小）」

「養う（幼）」＝「育成することを目指す（小）」

「創造性を豊かにする（幼）」＝「作品などから自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする（小）」

と比較することができる。このように細部を比較してみると、幼稚園は表現全体の目標であるということもあって、広がりを感じられる言葉が使用されており、小学校の場合は造形に関する用語「表現及び鑑賞」「造形的な見方、考え方」「色や形」など活動や対象をより具体的、限定的に示していることが読み取れる。最後の「創造性を豊かにする」に対応する部分については学習指導要領では学年の目標(2)の部分から関係する部分を取り上げた。続いて、幼稚園教育要領の表現のねらいと小学校学習指導要領図画工作科の第一学年及び第二学年の目標を下記に比較する。

資料2 幼稚園教育要領「表現」と小学校図画工作科学習指導要領 抜粋

#### 幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容

##### 表現

（保育所保育指針 第2章 保育の内容 3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容 オ 表現）

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

1. いろいろなもの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
2. 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
3. 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

#### 小学校図画工作科 教科の目標及び第1学年及び第2学年の目標

表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して気付くとともに、手や体全体の感覚などを働かせ、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。
- (2) 造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて考え、楽しく発想や構想をしたり、身の回りの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。
- (3) 楽しく表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり、楽しい生活を創造しようとする態度を養う。

「いろいろなものの美しさなどに対する（幼）」＝「造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて（小）」

「感じたことや考えたことを（幼）」＝「対象や事象を捉える造形的な視点について（小）」

「自分なりに（幼）」＝「自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して（小）」

「生活の中で（幼）」「様々な表現を楽しむ（幼）」＝「形や色などに関わり、楽しい生活を創造しようとする態度を養う（小）」

「表現して楽しむ（幼）」＝「創造的につくったり表現したりすることができるようにする（小）」

ここでさらに小学校指導要領の中には非常に具体的な単語を使用して指示されていることが見て取れた。また象徴的に感じられるのは、「表現して楽しむ（幼）」や「様々な表現を楽しむ（幼）」と「できるようにする（小）」という表現の違いである。ここに現れてくるのは、遊びを通して学びにつなげること、また自主的な活動の方向性を目標におき、それを環境として用意するという幼児教育の基本的な考え方と、小学校の教科としての達成的目標の違いであると考えられる。なお、保育所保育指針にも3歳以上児のねらい及び内容として幼稚園教育要領と同様の文言が使用されている。

## 2. 材料と発達段階

幼稚園教育と小学校教育の違いは、発達段階の違いによる適切な材料用具の種類や使用法の差異、また達成され得る造形技能の違いにも現れる。年齢によるハサミの使用段階や粘土の年齢別使用種類の差異、発達段階によって現れる絵画表現の特徴的な違いなどが考えられ、これについては、どちらの専門に将来就く学生もまずは基礎知識として全体を把握しておく必要があるだろう。この視点から題材を考えると、モダンテクニック・粘土の特性・クレヨンから絵の具までの描画材の種類と使用法・紙の種類・刃物やハサミの発達に応じた取り扱いなどの題材が幼稚園・小学校のどちらも関係する必要な知識であり、ただ言語や名称を覚えるのではなく、その実践的な使用法や取り扱いに慣れておく必要があると考えられる。なお、このような題材は、公立の教員採用試験や公務員幼保専門職採用試験で数多く取り上げられている題材と重なる部分が多い。

## 3. 先行研究を通しての学びの目標の比較

図画工作と造形表現の違いについて、材料用具・発達段階の差異の他に、活動や授業の構成の違いはどこにあるのだろうか。槇英子ら（2018）<sup>2</sup>はその論文で、石鹸での泡づくりという同一の材料を用いた幼稚園と小学校双方の現場での実践を通して、幼

児・児童の活動や姿の相違を研究している。その中で、幼稚園では「表現活動は表現だけではなく、(中略)その活動は5領域全体への発展を考慮して計画をすることも意識する必要がある。」と述べ「葉を使った遊びは多々あるが、教師が『これは葉っぱ』『この色は緑色』と教えることは、概念化をするためには必要なことである。しかし、造形表現の場合は、葉は『葉』であるという概念化とは別のところで、『何だろう?』『柔らかいなあ』『緑にもいろんな色があるなあ』『お皿になるかな?』『いいこと思いついた』と様々な活動につながり、それが『環境』『人間関係』『言葉』などの『表現』以外の領域の発達に作用する」、そしてこのことは「未分化な時期の幼児を総合的な見地から育てていこうとする理に適ったものである。」と具体的に述べている。つまり活動そのものは造形分野、表現の1つであるが、それが子どもたちの気づきや活動によって「幼児期の遊び場面における援助であるねらいを潜ませた環境構成」となるといえる。幼稚園段階での表現活動は、表現という領域に軸足の中心を置きながらも言葉や人間関係など、様々な領域を行き来する子どもたちの姿を容認しつつ、保育者は主にその為の環境として活動を用意することで遊びを総合的に学びにつなげていく活動となっている。これは、総合的で未分化、また急速に変化する発達段階により、集団にある発達段階の個人差が大きい段階であるという特徴にも配慮する中で必然的に受容されている考え方とも言えるだろう。対して小学校での学びについて上記の論文では「教師の関わりは常に授業のねらいに沿って行われていた。」「活動目標に限定して活動づくりをみていくと、図画工作の方がより造形的な見方・造形的なものの考え方を意識した活動計画となる。」と記されており、学びの目標がはっきりしており、教科の目標に集約される形での授業が行われる傾向にあると言える。

### Ⅲ 現状の授業での取り組み

#### 1. 授業目的別リストー幼稚園と小学校を比較して

現在のH大学での図画工作Ⅰ・Ⅱの授業内容について、その題材と特徴をここで振り返ってみたい。この授業では、その年度に取り組む内容以外にも様々な題材を用意しその年の現状に合わせて題材を組み合わせている。筆者が取り組んだことのある題材は資料3の通りである。左側には、授業内で何年度に実施したか各題材が小学校免許取得者、幼稚園免許取得者それぞれにとってどのような目的があるのかを表右側に示し、その代表的な事例を紹介した(資料4~7)。なお、図画工作Ⅱについては、筆者は2016年度に担当し、2017年度~2019年度は他の教員が担当している。

授業目的はA~Dに分類した。A.自分が専門とする校種で主に使用する材料や用具に触れること B.周辺の関係する校種で使用されている材料用具を知り、将来の現場での応用に生かすこと C.教材作成に直結する題材 D.子供たちの豊かな創造性を育む教員と

## 「図画工作Ⅰ」「図画工作Ⅱ」の題材について

2016	2017	2018	2019	種類	題材名	幼稚園 目的
○	○	○		絵画・版	ドローイング（長期休みの思い出）	A
			○	絵画・版	リレーショナルドローイング	D
○		○	○	絵画・版	モダンテクニック	A
○	○	○		絵画・版	絵巻物を描こう	B
○	○			絵画・版	絵の具で遊ぼう	A
		○		絵画・版	消しゴム版画	C
	○	○		絵画・版	スチレンボード版画（コラグラフ）	B
○				絵画・版	ベニヤ板版画（電鋸を使って）	B
○	○	○		絵画・版	墨で遊ぼう	A
○		○		工作	自然（2）秋 リースとモビール	A
○	○	○	○	工作	街を作ろう	A
			○	工作	動く車	B
○	○	○	○	工作	ガムテープバック	C
○				工作	ゴミ袋でなりきり衣装	C
○				工作	紙コップ工作	A
○	○	○	○	立体	小麦粉粘土	A
	○		○	立体	土粘土	A
○	○			立体	木片から作ろう	B
○				立体	製本（絵本作り）ポートフォリオ	C
○				立体	段ボール工作	C
○	○	○	○	造形遊び	洗濯バサミ	C
○	○			造形遊び	自然（1）春 自然と遊ぼう	A
				造形遊び	竹ひご造形遊び	B
				造形遊び	割り箸造形遊び	B
	○			鑑賞	若冲鑑賞	B
		○		鑑賞	アルチンボルド鑑賞	B
			○	鑑賞	アートカード鑑賞	B
		○		デジタル	HGUのアニメーションを作ろう	B



資料4 [造形遊び] 洗濯バサミを使って 実践事例



資料5 [デジタル] アニメーションをつくろう 実践事例



資料6 [造形遊び] 自然 (1) 春 自然と遊ぼう 実践事例



資料7 [絵画] 墨で遊ぼう 実践事例

して自己の創造的な技能や発想を豊かにする、この4点に分けて授業ごとに主な目的を表した。なお表では、Dは全ての題材に含まれること、BはAが含まれることから、 $A > B > D$ の順でAの目的が含まれていればC~Dの目的があってもAと優先的に表示することとした。また、この分類については、筆者がこれまで触れた教科書や題材をもとに評価しているものであり、現在も全国の現場で様々な新しい題材が取り組まれていることを考えると、あくまで筆者の主観的な分類であることを明記しておく。

この表の結果によると、現在の「図画工作I」での授業内容は、直接的には小学校課程での題材が多いことがわかる。小学校では、年間約60時間、計6年間で358時間の授業を行う必要がある。発達段階から考えても同じ時間数では未就学児と比較して多くの題材を行えることから、幼稚園のみの場合と比較して、教員側も題材数を多く知っていなければならない。例えば用具で言えば、小刀やノコギリなどに触れる項目は小学校免許取得希望の学生にとっては必須の事項である。また絵巻物などの日本の伝統的な文化に関わる表現に触れること、動く車などの比較的高度な機能を持った工作を自分で創意工夫して作り上げることなどが重要視されてくる発達段階であると言える。対して幼稚園課程では、3~5歳児の発達段階に合致した、無理なく達成感を味わえ

る課題を設定することの他、多くの行事などでの装飾物も保育者自身が準備する機会が多いことから、保育者自身が製作する造形的な教材研究が重要になってくる。なお、ここでは紙面の関係で詳しく触れることができないが、本学では近年、特別支援学校免許を副免として取得する学生も多い。特別支援学校の教員を目指す学生には、幼稚園免許希望学生と同じく、自分で教材を創意工夫してつくりだす力が非常に重要視されると言えるだろう。

## 2. 経験しておくべき題材の例

資料3の表右の欄を注目にして学生が経験しておくべき題材を改めて整理した(資料8)。幼稚園課程、小学校課程どちらでも取り組んでおくべき課題、つまり「図画工作I」の共通授業で行うべき課題として、まず幼稚園、小学校のどちらの目的にもAが入っているAA

資料8 題材リスト 小学校と幼稚園の目的 授業改善に生かす視点	
<b>AAの題材</b> (どちらの校種でも実践されている) ①ドローイング(長期休みの思い出) ②モダンテクニック ③絵の具で遊ぼう ④墨で遊ぼう ⑤自然(1)春 自然と遊ぼう ⑥自然(2)秋 リースとモビール ⑦街をつくらう ⑧紙コップ工作 ⑨土粘土	全学生が受講する 「図画工作I」 で取り扱う
<b>CCの題材</b> (どちらの校種でも指導者が教材研究として行う) ①洗濯バサミ ②ガムテープバック	「図画工作I」と 「図画工作II」と 「造形表現」 に振り分ける
<b>CAの題材</b> (小学校現場では児童が作り、幼稚園では保育者が教材として制作する) ①なりきり衣裳 ②段ボール工作 ③絵本づくり	「図画工作II」 で取り扱う
<b>BAの題材</b> (小学校課程で行われる) ①絵巻物を描こう ②ステレンボード版画(コラグラフ) ③ベニヤ板版画(電鋸を使って) ④動く車 ⑤木片から作る ⑥竹ひご造形遊び ⑦割り箸造形遊び ⑧若冲鑑賞 ⑨アルチンポルド鑑賞 ⑩アートカード鑑賞 ⑪アニメーションをつくらう	「造形表現」 で取り扱う
<b>ABの題材</b> (幼稚園課程で行われる) ①小麦粉粘土	「造形表現」 で取り扱う

の題材が第一候補になると言える。その後、幼稚園の教材研究・小学校の教材研究に入っているCCの題材が考えられる。その次に候補として考えられるのは、小学校で児童本人達が授業内で制作し、幼稚園では保育者が教材として取り組んでいるCAの題材で、この順に図画工作Iの授業での実施を検討することが望ましいと考えられる。また、BAの題材は、小学校で取り組まれることの多い題材であるということで、小学校の図画工作に関わる、新しい「図画工作II」の授業で行われることが望ましい。ここで、筆者のこれまで取り組んできた題材には、ABの題材が非常に少ない。つまり筆者が元々実施していた題材内容は、小学校現場で実施される内容にやや偏っていたことがわかった。今後、「造形表現」の授業を持つ際には、幼稚園課程で特徴的に行われる活動や題材内容を研究し、学生の実践力向上のための題材を増やしていく必要があると考えられる。

## 3. 学生が魅力を感じる題材

ここで、2016年度と2018年度に実施した授業内アンケートの中から、子供たちと実践してみたい授業内容について記述した内容をまとめたものを紹介する。このアンケートとは、15回の全授業内容が終わった後に授業課題の一部として行った。質問は、下記の2項目である。

#### 資料9

子供達と実践してみたい授業学生アンケート2016年度 (37名)

1. 自然（春）自然と遊ぼう（造形）12人
2. モダンテクニックで絵本づくり（絵画）7人
3. ゴミ袋でなりきり衣装（工作）4人
3. 色水遊び（造形）4人
4. 自然（秋）リースとモビール（工作）4人
5. 洗濯バサミで遊ぼう（造形）2人
6. 小麦粉粘土（立体）2人

#### 資料10

子供達と実践してみたい授業学生アンケート2018年度 (50名)

1. 自然（秋）リースとモビール（工作）13人
2. 水墨画で絵巻物を描こう（絵画）8人
3. 廃材で街を作ろう（工作）7人
4. 小麦粉粘土（立体）6人
5. 色水遊び（造形）4人
5. ガムテープバック（工作）4人
6. 紙コップ工作（工作）3人
7. 洗濯バサミで遊ぼう（造形）2人
8. アニメーションを作ろう（デジ）2人
9. 消しゴム版画（版）2人

(1) 図画工作の授業を通して自分が充実した制作を行えたものや苦勞したものなど、印象に残った題材の中から、保育・教育の現場で子供達と共に活動してみたい題材を1つ選び、タイトルを挙げて下さい。

(2) 上記で選んだ理由について自分がその題材に感じる魅力、子供達がこの題材で学べることやどこに充実感や楽しさ、苦勞を感じると予想するか、指導にあたって安全面や材料の面から特に注意すべきと思われることを自分なりの視点で詳しく書いて下さい。

本論では、質問(1)の回答として、2名以上の学生が挙げた題材を2016年の表（資料9）、2018年の表（資料10）に整理し、質問（2）の回答、題材の魅力や注意点として多くの学生が挙げたものを2016年度（資料11）、2018年度（資料12）としてまとめた。これには、造形遊び、絵画、工作、立体の各領域の様々な題材が挙がっている。前述した通り、この分野では小学校でも指導要領と発達段階に合致し、各領域を平均的に網羅していれば題材を自由に設定することが可能である。つまり、指示されて行われるのではなく、こういった質問の中で学生達が魅力を感じる題材が記憶に残り、それが自然な形で現場での研究授業や普段の活動・授業で実践の検討に上がることが一番のぞましいと言える。そういった意味で、このアンケートは非常に重要な意味を持つと言えるだろう。実際の授業では、特に小学校教員を目指す学生たちに他教科との違いに戸惑う場面も見られるが、この段階であまり現状の授業実践に限定せず、幅広く魅力的な題材を経験しておくことが、将来的には研究授業の幅の広さや充実にもつながってくると感じている。

#### 4. 題材や材料の応用力

ここで学んだ題材は、今後も学生の中に強く印象に残っていくものであり、実習や

資料11

子供と実践してみたい授業（2016年度） 子供の学びや意義及び注意点

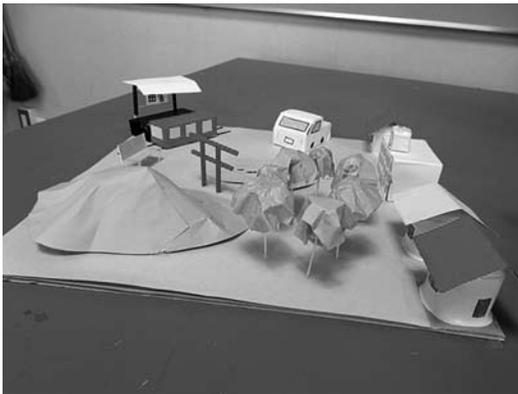
<p>〈自然（春）自然と遊ぼう（造形）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●材料集め→材料理解や作品への愛着</li> <li>●1つ1つ形の違うものを組み合わせることで構成力がつく</li> <li>●材料が同じではない→個性的な作品作り</li> <li>●自然体験や季節などへの理解</li> </ul> <p>注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●活動が天候に左右される</li> <li>●材料収集活動は安全のため範囲を予め設定する</li> <li>●衛生面や棘や長い枝などへの安全面に注意を</li> </ul>	<p>〈モダンテクニックを使った絵本づくり（絵画）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●生活の中で捨ててしまう材料→環境配慮と価値観の転換</li> <li>●既存のものを組み合わせることで構成力をつける</li> <li>●グループ活動→アイディアの共有や話し合いで妥協点を見出す</li> <li>●街という場所を理解すること、またその中から選択できること</li> </ul> <p>注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●素材同士の接着に苦勞する可能性がある</li> <li>●ハサミやグルーガンなどの取り扱い</li> <li>●材料収集活動は事前に行う</li> <li>●材料が乏しい場合は予め指導者が予備を用意</li> </ul>
<p>〈ビニール袋でなりきり衣装（工作）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ビニール袋の鮮やかな色を活用できる</li> <li>●なりきる楽しさ</li> <li>●着れるという機能の学び</li> <li>●グループ活動の利点</li> </ul> <p>注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ビニールの安全性</li> <li>●装飾のための様々な材料を準備すること</li> <li>●幼児には着るための土台は事前に支援者が準備する必要あり</li> </ul>	<p>〈色水遊び（造形）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●混色について遊びを通して学べる</li> <li>●色が変わる瞬間に立ち会える楽しみがある</li> <li>●水遊びの感触を味わうことができる</li> </ul> <p>注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●発達段階によっては容器の形状に注意する</li> <li>●汚れても良い服装や部屋で行うこと</li> </ul>

資料12

子供と実践してみたい授業（2018年度） 子供の学びや意義及び注意点

<p>〈自然（秋）リースとモビール（工作）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●材料集め→材料理解や作品への愛着</li> <li>●1つ1つ形の違うものを組み合わせることで構成力がつく</li> <li>●材料が同じではない→個性的な作品作り</li> <li>●自然体験や季節を感じることができる、植物などへの理解</li> </ul> <p>注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●素材同士の接着に苦勞する可能性がある</li> <li>●大きな枝などの危険性</li> <li>●材料収集活動は安全のため範囲を予め設定する</li> <li>●材料が乏しい場合は予め指導者が予備を用意</li> </ul>	<p>〈廃材で街を作ろう（工作）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●生活の中で捨ててしまう材料→環境配慮と価値観の転換</li> <li>●既存のものを組み合わせることで構成力をつける</li> <li>●グループ活動→アイディアの共有や話し合いで妥協点を見出す</li> <li>●街という場所を理解すること、またその中から選択できること</li> </ul> <p>注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●素材同士の接着に苦勞する可能性がある</li> <li>●ハサミやグルーガンなどの取り扱い</li> <li>●材料収集活動は事前に行う</li> <li>●材料が乏しい場合は予め指導者が予備を用意</li> </ul>
<p>〈水墨画で絵巻物を描こう（絵画）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●黒一色の濃淡で様々な色を表現</li> <li>●筆使いや白抜き剤などの新たな技法の面白さ</li> <li>●筆や紙、絵巻物の様式など伝統文化としての背景</li> <li>●オリジナルのアイディアも良いし、模写から始めることも可能</li> <li>●ストーリーを作る楽しみ</li> </ul> <p>注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●墨の汚れ対策</li> <li>●筆に慣れないため表したいものと技法の不一致</li> <li>●和紙などの材料の予算検討</li> </ul>	<p>〈小麦粉粘土を作ろう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●材料はすべて食用に使用されるもののため安全である</li> <li>●粘土を手作りすることで愛着がわく及び固さの調節ができる</li> <li>●粉が粘土になっていく過程や感触を味わうことができる</li> <li>●粘土になることとその粘土を使って作る2重の楽しみ</li> </ul> <p>注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●長期保存できないので衛生面に注意する</li> <li>●ベタベタした感触を嫌がる子がいる</li> <li>●水加減が難しい</li> <li>●汚れても良い服装や部屋で行うこと</li> </ul>

卒業後の現場で、造形活動及び図画工作の教科で実践してみたいと思う可能性の高いものであると考えられる。実際に現場で実践するためには、予算、実施時期など様々な条件に合致していかなければならない。学生がこれらの題材を現場で実践できる能力を身につけられているかどうかを厳密に検証するには、卒業後の姿を追いかける必要があるが、ここでは、授業のその後の効果について、学内の2年生以上の学生企画のイベントでこれらの題材が応用されている例、2例を挙げる。2017年度2年次の実践「ディコレスミュージアム」では、2018年のアンケートで学生が子供たちと実践してみたい題材の3位に挙がっていた「廃材で街をつくろう」（資料13）を発展させた形で、



資料13 [工作] 街をつくろう 授業内での実践事例



資料14 2年生子供イベント実践「秋の街をつくろう」

一クラスが「秋の街をつくろう」というタイトルで子供向けイベントを行った（資料14）。また、2016年、2018年のアンケートには入っていないが、学生から人気があった別の題材として「絵の具で遊ぼう」（資料15）の応用も見られた。これは、瓶に入った共同絵の具を使用し、筆だけではなくビー玉、スポンジ、木片や葉っぱなど様々な素材を使用してロール模造紙に複数名で絵を描く題材であり、絵は筆で描くものである、また一人で仕上げるものである、という既成概念を打ち破る効果を期待して、取り入れているものである。前述の「街をつくろう」と同様に題材に魅力を感じた学生達の企画により、2017年10月に3年生子ども実践ゼミの授業で浜松市鳴江アートセンターにて同名のタイトルで子供イベントを実施した（資料16）。これらの学生企画においては、教員は企画内容についての詳細な指導はせず、学生たちの自主的な立案に任せている中で、このように本授業において印象に残った題材を核にして企画を立ち上げ、子供イベントを実践し、研究に活用する例もみられるようになってきている。

ガムテープバックの題材は、実際にガムテープのみでバックを作成することは小学生の中学年から高学年でないと難しく、イベントなどでの実施例は見られるものの、



資料15 [絵画] 絵の具で遊ぼう  
授業内での実践事例



資料16 3年生子ども実践ゼミ イベント「絵の具で遊ぼう」

幼児及び小学校低学年での直接的な実践はむずかしい。しかし、学生たちは、この題材を授業で体験することを通してカラーガムテープの鮮やかな色や、糊など接着剤を別に用意しなくても粘着できる特性を活かし、手作り教材や空き箱・紙コップ工作の作成時に装飾として活用できることに気づいている姿が見られ、実際に学内でもカラーガムテープが教材作成などの際に有効に生かされている場面が見られる。このように実際に素材に触れることで、その特性や利点などを実践的に学び、応用していく力がつくこともわかってきた。

#### IV まとめ

本研究には、造形教育の視点から、幼稚園教諭免許と小学校教諭免許取得者の経験すべき学びを検討し、その授業目的や現状の授業内容を整理し、授業を分離するという目的があった。しかしながら、結果的に幼稚園での造形の学び、小学校の図画工作の学びそれぞれの、意図や趣旨が焦点化されることで、その性格の違いや共通点が見えてきた。違いとしては、幼稚園が遊びの中から学びを行なっていくこと、環境として用意する中での表現活動が他の領域と様々に結びついていくこと、対して小学校では具体的な学びの結果や目標の設定が重要なことである。また共通点は、この分野の特性である遊びと学びに共通する重要な事項として「興味関心」を高め、夢中になれる内的な動機づけができること、魅力的な題材作りができるようになることが重要であることである<sup>3</sup>。そのためには、両方の免許を取得する学生共に造形活動・図画工作科の授業でまず自分自身が「楽しそう」「面白そう」と感じる事ができる保育者・教育者になってもらうことが必要であることには変わりがない。

また今回、現状の把握の中で、幼稚園課程の「造形表現」の授業を展開する上で、

発達段階に合致した実践的な題材の不足が課題として浮かび上がった。これについては、今後実際に授業を展開するまでの課題としたい。今回の成果を生かし、本学における造形や図画工作の授業で各学生の取得を目指す免許の現場で必要とされる能力を身につけさせられるよう、授業研究をさらに深めていきたい。

[註]

1. 「教職課程認定基準等について—平成30年度教職課程認定等に関する事務担当者説明会資料」2018年12月20日配布によれば、平成32年度（令和2年度）より開始する教職課程以降は幼稚園教諭免許状の「領域に関する専門的事項」を小学校の「教科に関する専門事項」を持って充てることはできない、と明記されている。
2. (2018) 槇英子, 小橋曉子, 小林恭代, 「造形表現」と「図画工作科」の接続Ⅱ—「図画工作科」に焦点をあてて—, 千葉大学教育学部研究紀要, 第66巻, 第2号, 395~404頁より抜粋。
3. (2019) 高櫻綾子, 子どもが育つ遊びと学び—保幼少の連携・接続の指導計画から実践まで, 朝倉書店, 129~131頁には、遊びと学びに共通する動機づけとして熱中する環境を設定する重要性が述べられている。